

児童・生徒の学校と家庭における生活とストレス ——市内小学生と中学生の実態調査の結果から——

右 高 和 生¹⁾

Daily life and stress experienced by children at school and home : Survey report on school children at elementary and junior-high schools in the city

MIGITAKA Kazuo

要 約

本研究の目的は、市内の小学生と中学生の学校と家庭における生活と心理的ストレスの状況を、実態調査の結果から捉えようとした。その結果、小学生では「学校が楽しい」と感じるためには①何よりも「授業がわかる」こと、②そして、友だちや先生との人間関係の二つが大きく関係することがわかった。従って最もストレスとなるのも「勉強」であると約半数の児童が答えている。

中学生では、学校生活の核となるのは①友であり、②勉強である。そして最も大きなストレスとなるのはやはり「友」であるという結果も得た。家庭生活では「親が忙しすぎる」や「気持ちもわかってくれない」と感じ、ストレスをかかえながら家庭生活を送っている中学生も多いことがわかった。

今後は、他の地域での実態調査も行い、「子どもたちと生活環境」の視点からストレスの実態をとらえ、環境づくりと改善に結びつけていきたいと考えている。

1 問題と目的

平成19年度文部科学省調査による発表では、小学生・中学生を合わせて不登校者数が約12万9000人、いじめの認知数は小学生約6万1千人、中学生5万2千人となっている。そして別の調査機関では、若者の引きこもりの数は100万人を超えているとさえ発表されている。

この数からみても、現代の子どもたちや若者たちの生きる環境がいかに大変で、難しくなっているかが容易に推測できる。これはそのまま現代日本の学校のおかれている現状そのものと考えられるし、それぞれの学校でその数や内容についての地域差や学校差はあっても、抱えている問題は同様であると言える。

河上(1999)は「特にこの10年ほどの間の生徒た

ちの驚くべき変化を作り出したのは大人の変化によるところが大きい」と述べたが、その後さらに情報化が進み、激変し続けている今の社会から考えると子どもたちの変化はどのように想像すればいいのであろうか。そして河上(1999)は、その要因として、大人たちの住むそれぞれの地域社会の共同性がほとんどなくなったこと、そして親が自分の都合を優先し、同様にわが子だけしか考えなくなったことが大きな要因だと述べている。それが、子どもたちに対しての「過保護」であったり、また「放任」であったりする。これは、現代の大人社会の全般の傾向であり、その分、子どもたちの「心」に降りかかる問題は深刻であり、大きなものがある。こうした社会環境の中で、何か大きな「ストレス」を抱え、毎日それぞれが心を痛め、悩みながら闘っているそんな子どもたちの姿や様子が浮かび上がってくる。

国立教育政策研究所では、茨城県龍ヶ崎市の小、中学校と同市の教育センターが連携を組み、小学

1) 中部大学現代教育学部児童教育学科

生・中学生のストレス状況を中心とした追跡調査を1997年度から年2回の割で行ってきている。この調査は生徒指導上の諸問題の背景要因として注目すべきストレスを測定し、それが問題行動等との発生とどのように関わるのかを検討し、社会心理学的な見地から予防的な生徒指導のあり方のために役立てたいとしている。その結果、日本の子どもの問題行動等の背景には、それが「いじめ」なのか、暴力行為なのか、あるいは「不登校」なのかを問わず、ストレスが大きく関わっている」(滝、2001)としている。

筆者は、かつて中学校と小学校に勤務し、生徒や児童と関わる中で、大人たちが作ったこの時代と社会という環境の中で悩む子どもたちの生活、そこにいつも何か大きな「ストレス」を抱えている子どもたちの姿を実際に見つめてきたし、肌で感じてきた。そのため、2000年から2002年にかけて、小学生と中学生904名の実態調査を行いながら研究に取り組んできたが(右高、2002)本研究では、その後6年を経て、学校や家庭・地域社会で生活する子どもたちがどのような心理的ストレスを感じているのか、そして、できれば「この環境の中で、その子にとって、ストレッサーは何なのか」を探れないか、また、小学生や中学生の心理状況や「とらわれ」(滝、2001)の傾向を調べたいと考え、実態調査に取り組んできた。

そしてこの実態調査を進めていく中で、やがての日に、人(特に子どもたちの)住むその地域差や環境差の違いとストレスの関連性が少しでも捉えることができれば、と考えているが、今回まずはそうした環境差や学校差を考えず、小学生と中学生の平均的な心の内面を「ストレス」の方向に的を向け、最も基本的な観点から捉えながら、考察しようと考えた。

2 方法

右高(2002)と同様の質問紙を使用した。

また、実態調査による資料の収集と集約方法については、次のように捉えた。

- (1) 児童・生徒の生活状況や心理的な側面をより平均的な傾向を知るためには、全体的で幅広い

地域の学校から「実態調査」をし、資料を集める必要がある。

- (2) また、児童・生徒の生活状況や心理的な側面は、大人の生活や環境と密接に関係しているため、実態調査の実施に当たっては児童・生徒の生活環境面を考え、①住宅地を中心とした地区、②都会化への変貌の激しい地区、③古い伝統を残しながら車と人の出入りの激しい地区、の3つの地域環境を考えること。
- (3) 質問の内容からできるだけ高学年がふさわしいと考え、小学生では6年生に、中学生では3年生の2学年に的を絞って調査することにした。

以上のことから、「実態調査」を春日井市内の地理的、歴史的、社会的な環境や特性から考えて、東部地区、中部地区、西部地区の3つの地域の中からの小学生と中学生の調査を実施した。この3つの地域別に調査し、集約したのは、上記のようにより平均的な実態を知るための他に、「環境差と子どものストレス」を意識したが、本調査では調査方法が不十分であり、考慮することはできないものである。そのことを踏まえた上で、参考までに地域と学校状況を簡単に記しておく。

東部地区：ニュータウン地域。閑静な住宅地域であり、周辺は森林等に囲まれた自然豊かな環境になっている。ニュータウンができて約40年が経過した。

M小学校(小規模校)とB中学校(中規模校)で実態調査を行った。

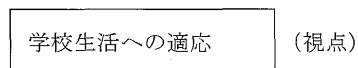
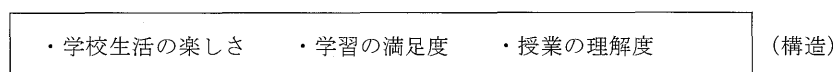
中部地区：市の中心市街地として発展してきた地域。近年は新しい幹線道路「国道19号線」の完成と共に、地域が繁華街に変貌した。さらにJR勝川駅周辺を軸に交通網の整備や大々的な地域開発が進められている最中である。

F小学校(小規模校)とD中学校(大規模校)で実態調査を行った

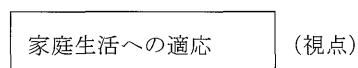
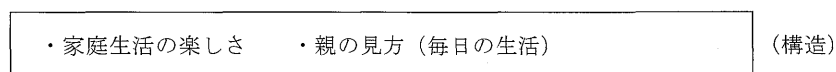
西部地区：中部地区に隣接し、名古屋市と小牧市にも隣接しているため、名鉄小牧線沿いの市街地として発展してきた。昔からの古い伝統や習わしが多く残っている地域。近年地域開発が進んで都会化

《 調査内容の構造と視点 》

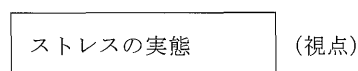
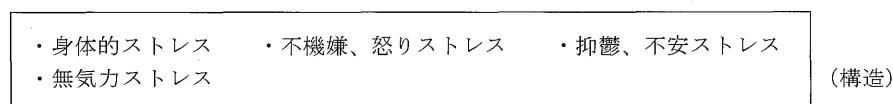
ア 学校生活



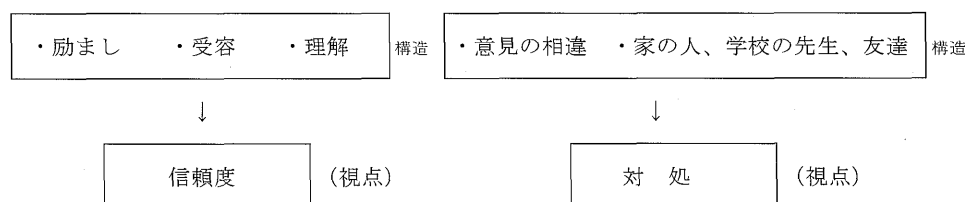
イ 家庭生活



ウ 体や心の様子



エ 人間関係



し、自然環境が次第に少なくなっている。

O 小学校（大規模校）と E 中学校（大規模校）で実態調査を行った。

(1) 調査対象

市内小学 6 年生児童 男子 46 名、女子 48 名 計 94 名

市内中学 3 年生生徒 男子 54 名、女子 51 名 計 105 名（有効回答総数 103 名）

(2) 調査日程 平成 20 年 7 月 10 日～7 月 18 日

(3) 調査内容

国立教育政策研究所と共同研究している茨城県龍ヶ崎市教育センターの実施している「調査内容（2001、2002）」のうち、「いじめの被害経験」項目と「いじめ加害経験」の項目を除いての質問項目を

使用した。また、調査の目的から考え、一部「家庭」と「地域」についての独自の調査項目を付加設定して実施した。

(4) 調査方法

ア 調査に当たって、学校別、学年別、男女別に記入し、無記名の質問紙調査法により実施した。

イ 本調査では、「よくあてはまる」「すこしあてはまる」「あまりあてはまらない」「ぜんぜんあてはまらない」の 4 件法で回答を求めた。

3 結果

(1) 質問 1 「児童、生徒の学校と家庭生活の実態調査」結果

ア 学校生活、授業のこと

ア 質問「学校が楽しい」

表1 学校がたのしい

東 部 (B中, M小)					中 部 (D中, F小)					西 部 (E中, O小)				
年・性	よく	すこし	あまり	全然	年・性	よく	すこし	あまり	全然	年・性	よく	すこし	あまり	全然
小6 男	100.0	0.0	0.0	0.0	小6 男	73.7	21.1	5.3	0.0	小6 男	82.4	5.9	11.8	0.0
小6 女	75.0	18.8	6.3	0.0	小6 女	80.0	20.0	0.0	0.0	小6 女	94.1	0.0	5.9	0.0
中3 男	21.1	63.2	10.5	5.3	中3 男	41.2	23.5	23.5	11.8	中3 男	53.3	40.0	6.7	0.0
中3 女	22.2	66.7	0.0	11.1	中3 女	50.0	50.0	0.0	0.0	中3 女	38.9	27.8	22.2	11.1
全 男	48.3	41.4	6.9	3.4	全 男	58.3	22.2	13.9	5.6	全 男	68.8	21.9	9.4	0.0
全 女	47.1	44.1	2.9	5.9	全 女	64.5	35.5	0.0	0.0	全 女	65.7	14.3	14.3	5.7

表2 授業がよくわかる

東 部 (B中, M小)					中 部 (D中, F小)					西 部 (E中, O小)				
年・性	よく	すこし	あまり	全然	年・性	よく	すこし	あまり	全然	年・性	よく	すこし	あまり	全然
小6 男	70.0	30.0	0.0	0.0	小6 男	31.6	47.4	21.1	0.0	小6 男	41.2	47.1	11.8	0.0
小6 女	75.0	25.0	0.0	0.0	小6 女	46.7	53.3	0.0	0.0	小6 女	41.2	41.2	17.6	0.0
中3 男	26.3	57.9	15.8	0.0	中3 男	29.4	64.7	5.9	0.0	中3 男	13.3	53.3	13.3	20.0
中3 女	16.7	50.0	27.8	5.6	中3 女	12.5	56.3	25.0	6.3	中3 女	22.2	44.4	22.2	11.1
全 男	41.4	48.3	10.3	0.0	全 男	30.6	55.6	13.9	0.0	全 男	28.1	50.0	12.5	9.4
全 女	44.1	38.2	14.7	2.9	全 女	29.0	54.8	12.9	3.2	全 女	31.4	42.9	20.0	5.7

小学生では、「学校が楽しい」と90%前後の児童が答えている。しかし、男女それぞれ違いはあるが、「あまり楽しくない」と答えた児童が約5%～12%いるが、その一番の理由は、「友達との関係から」が理由になっているのが気になる。

中学生でも「楽しい」と答えている生徒が大半であるが、「全然楽しくない」や「あまり楽しくない」と答えている生徒が目立つ。特に、D中の男子やE中の女子は35.3%、33.3%の生徒であり、その理由の一番としてやはり「友達との関係」そして「勉強」をあげている。

(イ) 質問「授業がよくわかる」

しかし、質問「授業がよくわかる」については、「あまりよくわからない」と答えた小学生 (F小男子21.1%、O小男子11.8%、O小女子17.6%)、そして中学生では学校によって多少の違いはあるが、30%前後の生徒が「あまりよくわからない」や「全然わからない」と答えている。それでも、勉強は別にして中学生が全体的に「学校は楽しい」と答えている率が高いのは、中学生の学校との心情的な結びつきや関わりりの深さからの結果であろうし、また子どもにとって、学校が勉強だけでなく、学校生活のもつ意味の大きさや学校の存在の大きさが確認でき

る。

イ 先生のこと

(ア) 質問「学校の先生は忙し過ぎる」

小学生、中学生共に、約半数が「よく思う」「少し思う」と答えている。毎日の教師の姿が子どもたちには、「忙しい先生」として捉えられているようである。

(イ) 質問「ふだんから、あなたの気持ちをよくわかろうとしてくれる」

この質問は児童・生徒の先生との人間関係調査として設定した。小学生では60%以上が「そう思う」と答えているのに対して、中学生では逆に30%～50%が「そうは思わない」という回答が多くなっている。

ウ 家庭、家族のこと

(ア) 質問「家は楽しい」

市内小学生、中学生共に「楽しい」と回答しているが、それでも中学生では「あまり楽しくない」や「全然楽しくない」と回答している生徒も多くなっている。特にE中やO小では、全体的にその数値が多い傾向が見られる。

表3 学校の先生は忙しすぎる

東 部 (B中, M小)					中 部 (D中, F小)					西 部 (E中, O小)				
年・性	よく	すこし	あまり	全然	年・性	よく	すこし	あまり	全然	年・性	よく	すこし	あまり	全然
小6 男	0.0	30.0	50.0	20.0	小6 男	36.8	26.3	21.1	15.8	小6 男	23.5	29.4	17.6	29.4
小6 女	18.8	43.8	31.3	6.3	小6 女	20.0	6.7	46.7	26.7	小6 女	17.6	35.3	23.5	23.5
中3 男	15.8	31.6	47.4	5.3	中3 男	23.5	23.5	47.1	5.9	中3 男	6.7	33.3	53.3	6.7
中3 女	0.0	50.0	38.9	11.1	中3 女	18.8	25.0	43.8	12.5	中3 女	5.6	16.7	61.1	16.7
全 男	10.3	31.0	48.3	10.3	全 男	30.6	25.0	33.3	11.1	全 男	15.6	31.3	34.4	18.8
全 女	8.8	47.1	35.3	8.8	全 女	19.4	16.1	45.2	19.4	全 女	11.4	25.7	42.9	20.0

表4 ふだんから、あなたの気持ちを、よくわかろうとしてくれる。

学校の先生

東 部 (B中, M小)					中 部 (D中, F小)					西 部 (E中, O小)				
年・性	思う	すこし	あまり	思わない	年・性	思う	すこし	あまり	思わない	年・性	思う	すこし	あまり	思わない
小6 男	40.0	30.0	30.0	0.0	小6 男	26.3	47.4	10.5	15.8	小6 男	11.8	47.1	17.6	23.5
小6 女	62.5	31.3	6.3	0.0	小6 女	40.0	40.0	13.3	6.7	小6 女	29.4	52.9	17.6	0.0
中3 男	31.6	42.1	10.5	15.8	中3 男	11.8	35.3	35.3	17.6	中3 男	6.7	40.0	26.7	26.7
中3 女	16.7	27.8	38.9	16.7	中3 女	12.5	56.3	12.5	18.8	中3 女	16.7	27.8	22.2	33.3
全 男	34.5	37.9	17.2	10.3	全 男	19.4	41.7	22.2	16.7	全 男	9.4	43.8	21.9	25.0
全 女	38.2	29.4	23.5	8.8	全 女	25.8	48.4	12.9	12.9	全 女	22.9	40.0	20.0	17.1

表5 家は楽しい

東 部 (B中, M小)					中 部 (D中, F小)					西 部 (E中, O小)				
年・性	よく	すこし	あまり	全然	年・性	よく	すこし	あまり	全然	年・性	よく	すこし	あまり	全然
小6 男	80.0	20.0	0.0	0.0	小6 男	63.2	31.6	5.3	0.0	小6 男	70.6	23.5	5.9	0.0
小6 女	81.3	12.5	6.3	0.0	小6 女	66.7	26.7	6.7	0.0	小6 女	58.8	5.9	29.4	5.9
中3 男	31.6	42.1	26.3	0.0	中3 男	47.1	23.5	17.6	11.8	中3 男	53.3	20.0	13.3	13.3
中3 女	44.4	38.9	5.6	11.1	中3 女	68.8	31.3	0.0	0.0	中3 女	27.8	33.3	16.7	22.2
全 男	48.3	34.5	17.2	0.0	全 男	55.6	27.8	11.1	5.6	全 男	62.5	21.9	9.4	6.3
全 女	61.8	26.5	5.9	5.9	全 女	67.7	29.0	3.2	0.0	全 女	42.9	20.0	22.9	14.3

(イ) 質問「父や母は忙しすぎる」

そして、この質問「父や母は忙しすぎる」でも、各小学校の半数以上の子どもたちが「そう思う」と答え、中学生でも学校によって多少の違いはあるが、同様の回答数となっていることから、忙し過ぎる父や母の姿を横目にしながら生活する小学生や中学生の姿がある。同時に、このことが「家は楽しくない」との回答と何らかの関連性も感じられる。

(ウ) 質問「もし、あなたが悩みや不満を言っても、いやな顔をしないで聞いてくれる」

次に、児童・生徒の家族との関係について問うてみた。「家の人」についてどう捉えているかを質問

したところ、男子の小学生、中学生を問わず、約30%～50%が「そうは思わない（悩みや不満を聞いてくれない）」と答えているし、女子でも、M小を除いて約10%～20%が同様（悩み不満を聞いてもらえない）の回答をしている。

(エ) 質問「(家の人は) ふだんから、あなたの気持ちを、よくわかろうとしてくれる」

小学生では、多くが「そう思う」と答えているが5%～10%が「そうは思わない」と思っているようだ。特にO小の女子では、30%近くとなっている。家庭環境の何が要因になっているのであろうか。

中学生では、男子の60%前後が「そう思う」と回

表6 もし、あなたが、悩みや不満を言っても、いやな顔をしないで聞いてくれる。

家の人

東 部 (B中, M小)					中 部 (D中, F小)					西 部 (E中, O小)				
年・性	思う	すこし	あまり	思わない	年・性	思う	すこし	あまり	思わない	年・性	思う	すこし	あまり	思わない
小6 男	50.0	20.0	30.0	0.0	小6 男	63.2	21.1	10.5	5.3	小6 男	47.1	17.6	29.4	5.9
小6 女	75.0	18.8	6.3	0.0	小6 女	53.3	26.7	13.3	6.7	小6 女	47.1	29.4	11.8	11.8
中3 男	15.8	63.2	10.5	10.5	中3 男	52.9	17.6	11.8	17.6	中3 男	33.3	26.7	26.7	13.3
中3 女	27.8	61.1	5.6	5.6	中3 女	62.5	12.5	18.8	6.3	中3 女	50.0	27.8	5.6	16.7
全 男	27.6	48.3	17.2	6.9	全 男	58.3	19.4	11.1	11.1	全 男	40.6	21.9	28.1	9.4
全 女	50.0	41.2	5.9	2.9	全 女	58.1	19.4	16.1	6.5	全 女	48.6	28.6	8.6	14.3

表7 ふだんから、あなたの気持ちを、よくわかろうとしてくれる。

家の人

東 部 (B中, M小)					中 部 (D中, F小)					西 部 (E中, O小)				
年・性	思う	すこし	あまり	思わない	年・性	思う	すこし	あまり	思わない	年・性	思う	すこし	あまり	思わない
小6 男	60.0	30.0	10.0	0.0	小6 男	63.2	31.6	0.0	5.3	小6 男	64.7	23.5	11.8	0.0
小6 女	81.3	12.5	6.3	0.0	小6 女	66.7	26.7	6.7	0.0	小6 女	47.1	23.5	11.8	17.6
中3 男	36.8	31.6	21.1	10.5	中3 男	35.3	23.5	23.5	17.6	中3 男	40.0	26.7	20.0	13.3
中3 女	27.8	55.6	11.1	5.6	中3 女	75.0	6.3	18.8	0.0	中3 女	27.8	44.4	22.2	5.6
全 男	44.8	31.0	17.2	6.9	全 男	50.0	27.8	11.1	11.1	全 男	53.1	25.0	15.6	6.3
全 女	52.9	35.3	8.8	2.9	全 女	71.0	16.1	12.9	0.0	全 女	37.1	34.3	17.1	11.4

答しているが、逆に「そうは思わない」と思っている生徒も極めて多いことがわかる。女子でも20%前後が「そうは思っていない」結果となっている。

エ 友達のこと

「友だち」との人間関係についての質問「もし、あなたに元気がないと、すぐに気づいて励ましてくれる」に対して、女子が圧倒的に「そう思う」と感じ

ている。しかし、男子は小学生、中学生ともに「そうは思わない」傾向が出ている。また中学生女子では、約10%前後が親しい友だちさえにも信頼を寄せていない部分を見せているし、男子中学生では、20%～30%とさらに高い数値で友だちとの距離を感じている生徒がいることがわかる。学校を中心に生活している青年前期の最近の中学生の人間関係の状況の一端でもあると捉えられる。

《資料1 身体的なストレス》

ア 質問「体から力がわいてこない」

表8 体から力がわいてこない

東 部 (B中, M小)					中 部 (D中, F小)					西 部 (E中, O小)				
年・性	よく	すこし	あまり	全然	年・性	よく	すこし	あまり	全然	年・性	よく	すこし	あまり	全然
小6 男	0.0	0.0	70.0	30.0	小6 男	5.3	10.5	31.6	52.6	小6 男	5.9	0.0	47.1	47.1
小6 女	6.3	0.0	56.3	37.5	小6 女	0.0	33.3	26.7	40.0	小6 女	11.8	23.5	17.6	47.1
中3 男	15.8	15.8	47.4	21.1	中3 男	11.8	29.4	35.3	23.5	中3 男	20.0	6.7	53.3	20.0
中3 女	5.6	22.2	55.6	16.7	中3 女	6.3	31.3	50.0	12.5	中3 女	16.7	16.7	33.3	33.3
全 男	10.3	10.3	55.2	24.1	全 男	8.3	19.4	33.3	38.9	全 男	12.5	3.1	50.0	34.4
全 女	5.9	11.8	55.9	26.5	全 女	3.2	32.3	38.7	25.8	全 女	14.3	20.0	25.7	40.0

イ 質問「気持ちが沈んでいる」

表9 気持ちがしずんでいる

東 部 (B中, M小)					中 部 (D中, F小)					西 部 (E中, O小)				
年・性	よく	すこし	あまり	全然	年・性	よく	すこし	あまり	全然	年・性	よく	すこし	あまり	全然
小6 男	10.0	0.0	30.0	60.0	小6 男	0.0	0.0	42.1	57.9	小6 男	11.8	0.0	23.5	64.7
小6 女	0.0	6.3	25.0	68.8	小6 女	0.0	20.0	46.7	33.3	小6 女	11.8	23.5	29.4	35.3
中3 男	0.0	21.1	42.1	36.8	中3 男	11.8	23.5	23.5	41.2	中3 男	13.3	40.0	20.0	26.7
中3 女	0.0	11.1	55.6	33.3	中3 女	18.8	12.5	25.0	43.8	中3 女	33.3	16.7	38.9	11.1
全 男	3.4	13.8	37.9	44.8	全 男	5.6	11.1	33.3	50.0	全 男	12.5	18.8	21.9	46.9
全 女	0.0	8.8	41.2	50.0	全 女	9.7	16.1	35.5	38.7	全 女	22.9	20.0	34.3	22.9

《資料2 不安・怒り傾向のストレス》

ア 質問「いらいらする」

表10 いらいらする

東 部 (B中, M小)					中 部 (D中, F小)					西 部 (E中, O小)				
年・性	よく	すこし	あまり	全然	年・性	よく	すこし	あまり	全然	年・性	よく	すこし	あまり	全然
小6 男	20.0	20.0	20.0	40.0	小6 男	10.5	21.1	26.3	42.1	小6 男	5.9	17.6	58.8	17.6
小6 女	25.0	18.8	25.0	31.3	小6 女	20.0	26.7	33.3	20.0	小6 女	11.8	23.5	41.2	23.5
中3 男	10.5	31.6	42.1	15.8	中3 男	17.6	11.8	35.3	35.3	中3 男	33.3	20.0	13.3	33.3
中3 女	11.1	16.7	50.0	22.2	中3 女	43.8	18.8	25.0	12.5	中3 女	55.6	27.8	11.1	5.6
全 男	13.8	27.6	34.5	24.1	全 男	13.9	16.7	30.6	38.9	全 男	18.8	18.8	37.5	25.0
全 女	17.6	17.6	38.2	26.5	全 女	32.3	22.6	29.0	16.1	全 女	34.3	25.7	25.7	14.3

イ 質問「さびしい」

表11 さびしい

東 部 (B中, M小)					中 部 (D中, F小)					西 部 (E中, O小)				
年・性	よく	すこし	あまり	全然	年・性	よく	すこし	あまり	全然	年・性	よく	すこし	あまり	全然
小6 男	0.0	0.0	10.0	90.0	小6 男	0.0	0.0	31.6	68.4	小6 男	5.9	5.9	11.8	76.5
小6 女	12.5	6.3	6.3	75.0	小6 女	0.0	33.3	20.0	46.7	小6 女	5.9	17.6	23.5	52.9
中3 男	5.3	5.3	63.2	26.3	中3 男	0.0	5.9	29.4	64.7	中3 男	13.3	13.3	26.7	46.7
中3 女	0.0	0.0	44.4	55.6	中3 女	6.3	6.3	37.5	50.0	中3 女	5.6	22.2	22.2	50.0
全 男	3.4	3.4	44.8	48.3	全 男	0.0	2.8	30.6	66.7	全 男	9.4	9.4	18.8	62.5
全 女	5.9	2.9	26.5	64.7	全 女	3.2	19.4	29.0	48.4	全 女	5.7	20.0	22.9	51.4

4 考察

《学校生活について》

(1) 小学生の学校生活とストレスについて

調査の結果から、対象の小学生のほとんど（小学生 90%前後）が「学校は楽しい」と答えているが、もう一つの調査「授業がわかる」についても 80%以

上の児童が「わかる」と答えており、「学校が楽しい」の理由の根底に「授業がわかる」こととの関連性は大きく、実際にその理由を尋ねたところ「授業がわかる」「友だちがいる」「先生が楽しい」を多くの児童があげている。学校生活は子どもたちにとって、何よりも友だちや先生との良好な人間関係に支えられた上でのことであることを教えてくれている。

また、調査「いらいらする」では、(O 小男子は

23%の数値) 約31%～46%の小学生の児童が「よくいらいらする」や「少しいらいらすることがある」と答えている。そしてその「いらいらする」原因は「勉強のこと」と多くの児童が答えており、小学生が学校生活の中で、勉強のことで心理的にいらいらしながら生活している状況が読み取れる。特にM小の男子、女子ともに全員が「授業がよくわかる」と答えているが、「いらいらする」と答えた児童はそれぞれ40%、43.8%もあり、その原因としてやはり「勉強のこと」をあげており、小学生(6年生)の学校生活の中で心理的に占める「勉強」の存在感の大きさがわかる。

即ち言い換えれば、一人ひとりの子どもたちが「さらに授業が楽しい」「より一層勉強がわかる」学校生活こそ「心の安心」なのであり、そういう学校生活を求めている調査結果であるとも言える。

(2) 中学生の学校生活とストレスについて

中学生では学校生活を「あまり楽しくない」とする傾向が学校差、男女差の違いもあるが、6%～35%でみられるが、小学生との違いは、「授業があまりよくわからない」と答えた生徒が約30%前後もいる中で「学校が楽しい」と答えている率が65%以上と高い数値であり、中学生では授業は学校生活の大きな部分を占めるものではあるが、さらに学校生活を大きく左右するものが他にあり、その大きな要素が「友だち」との関わり等であることを示している。

同時に「友だち」の存在は、場合によっては、逆に大きなストレスになっていたりすることもわかる。調査「いらいらする」や「不機嫌で怒りっぽい」、「気持ち沈んでいる」と答えたその理由や原因の一番を「友だち」として挙げており、学級内での人間関係の複雑さから悩みやストレスの大きな原因になっていることがわかる。

《家庭生活について》

(1) 小学生の家庭生活とストレスについて

前述したように、子どもたちを取りまく生活は、成長とともに勉強の問題を含め、多くの人間関係の問題やトラブルも多くなっていく。それを一番慰め、癒してくれる場所として「家庭」や「家族」の存在が大きい。従って、調査「家が楽しい」でも、

小学生の93%以上が「楽しい」と答えているのである。しかし、O小学校の女子の35%が「(家は)あまり楽しくない」としている他、その他の小学校の男子・女子ともに5%～6%が同様の答えをしている。その理由として一番にあげているのが「お父さんもお母さんも忙しすぎる」である。M小の女子、F小の女子、O小の女子それぞれが「家のことで不機嫌になる」や「家のことでいらいらする」「怒りっぽくなる」「怒りをぶつけたい」等のストレスを抱えた回答をしている。家庭や家族が自由で気楽な存在であるが故に甘えやわがままも手伝っての回答にもなっているが、それだけではない子どもたちの深刻な悩み、そして家庭の問題が如何に大きなストレスになっているのかも伺い知ることができる。

それは調査「家族が悩みや不満を言っても、いやな顔をしないで聞いてくれる」では、「そうは思わない」の回答が(男女差はあるが)平均して20%～35%となっており、その上で「楽しくない」と答えている。そこに、「家庭」を何か寂しく見つめている小学生の姿が出ていると捉えられる。

(2) 中学生の家庭生活とストレスについて

中学生の「家は楽しい」では約60%以上が「楽しい」と答えているが、反面(D中の女子を除いて)、26%～39%が「あまり楽しくない」や「全然楽しくない」と回答している。その理由として、各校とも「家のことで悩んでいる」が最も多く、次いで「勉強で悩んでいる」であり、「親が嫌い」や「親が好きではない(女子が多い)」も続いている。また「自分の居場所がない」と答えた男子の回答もある。これらの回答からは、「家」や「家族」に対して抑鬱的な悩みやストレスを感じながらも他人に相談もできずに生活している中学生が意外と多い状況になっている。

これは調査「親は忙しすぎる」についても「そう思う」の回答も約42%と多く、その親の忙しい状況を、中学生たちは ①帰ってくるのが遅い(約55%) ②いつも忙しそう(約38%) ③ほとんど(家に)いない他の順で答えている。父や母が忙しい状況であるため、ゆっくりと話のできない状況であったり、親子が一緒にいない現代の「家庭」や「家族」の状況を中学生のある種の訴えとして読み取ることがで

きる。

また、「ふだんから、あなたの気持ちを、よくわかってしてくれる」に対して中学生では、男子の60%前後が「そう思う」と回答しているが、逆に「そうは思わない」と思って「わかってもらえない親」を訴えている生徒も極めて多いことがわかる。特に女子では20%前後の回答となっており、忙しく、「すれちがい家族」の一端が伺える。

さらに、別の調査「さびしいと思う」について、中学生の中で約6%～27%（学校差、男女差がある）が「そう思う」「少しそう思う」と答えており、その理由には「友だちとの関係」、「勉強のこと」そして「家のこと」なのである。

現代の大人社会が多忙化、合理化、スピード化していく中で、中学生たちが少なくとも家のこと、父や母・家族のこと、そして友だちを中心とする人間関係に心を痛め、ストレスに耐えながら学校と家庭生活を送っていることが今回の調査でかなり捉えることができた。

《小学生と中学生のストレスの表出とその形態》

今回の調査では、女子よりも男子に「身体的ストレス」型が認められ、また中学3年生よりも小学6年生の方に、そして「不安・怒りストレス」型においても同様の性差となって表れた。

「身体的ストレス」の傾向について内容を見ると、特に「頭痛がする」について、小学生では、①友だちのこと ②家の人のこと、が多くなっている。中学生では、①勉強のこと ②友だちのこと ③家の人のこと、となっている。また、調査「誰かに怒りをぶつけたい」で、小学生では、①家の人のこと（F小、O小）が多く出てきている。中学生では、①友だちのこと②勉強のこと ③家の人のこと、となっており、共に「家の人のこと」で悩んだり、ストレスを抱え、我慢を強いられているものとなっていることがわかる。

「不安・怒りストレス」の傾向についてもその内容をみてみると、質問ウ「いらいらする」の小学生では、①勉強のこと ②家の人のこと ③友だちのこと、となっている。中学生では、①勉強のこと ②友だちのこと ③家の人のこと、となっており、学校差、学年差、男女差はあるが、少なくとも、この

3つが子どもたちのストレスになっていることを捉えることができた。

右高の調査（2002）では、市内の小、中学生のストレスの表出のしかたが、東部地区、中部地区、西部地区によってが多少違うものとなっており、今もその疑問を抱きながらの取り組みであったが、今回の実態調査において、調査の実施学校数や調査人数が少ないために大きなヒントを得ることもできなかった。

また、こうしたストレスの表出と形態については、茨城県龍ヶ崎市教育センターの発表のものに前に筆者が調査した結果（右高、2002）を次に示しておくが、それぞれストレスの傾向が多少異なったものとなっている。

5 今後の課題

- (1) 今回の調査結果については、簡単なまとめと集約で終わっているので、これをさらに心理学的に分析して捉えていく必要がある。
- (2) 児童・生徒の生活環境を意識しながら、他の地域での実態調査をするなどの研究を進めて比較検討する必要がある。
- (3) 「子どもと生活環境」の視点からストレスを見つめ、できるだけ具体的な問題点や改善点を洗い出し、子どもに生きる生活環境づくりや改善の実践に結びつくものにしたい。

資料

【小学生の相関順位】

龍ヶ崎市教育センター発表資料（2002）

右高（2002）

第1位	友人と不機嫌・怒り	勉強と無気力
第2位	勉強と無気力	勉強と抑鬱・不安
第3位	友人と抑鬱・不安	家庭と抑鬱・不安

【中学生の相関順位】

龍ヶ崎市教育センター発表資料（2002）

2002年調査結果

（右高）

第1位	勉強と無気力	勉強と無気力
第2位	友人と不機嫌・怒り	友人と不機嫌・怒り

り
家庭と無気力

第3位 勉強と身体的

文献

- Ahrentzen, S., Jue, G. M., Skorpanich, M. A. & Evans, G. W. 1982 School Environments and Stress. G. W. Wvans. (ed.) Environmental Stress, Cambridge University Press, pp. 224-255. Arnold, L. E. (ed.) 1990 Childhood Stress. Wiley.
- Blom, G. E., Cheney, B. D., & Snoddy, J. E. 1986 Stress in Childhood (本明寛監訳、原口京子訳 1998 児童期のストレス)
- Edwards, D. L. & Foster, M. A. 1995 Uniting the Family and School Systems: A Process of Empowering the School Counselor. The School Counselor, 42, 277-282.
- 秦政春 1994 小学生のストレス——「教育ストレス」に関する調査研究 (Ⅳ)——福岡教育大学紀要 43-4、129-182.
- 秦政春 1995 中学生のストレス——「教育ストレス」に関する調査研究 (Ⅴ)——福岡教育大学紀要 44-4、119-195.
- 茨城県龍ヶ崎教育センター 2001-1「学校生活に関する調査」報告書
- 茨城県龍ヶ崎教育センター 2002-1「学校生活に関する調査」報告書
- 茨城県龍ヶ崎教育センター 2002-2「学校生活に関する調査」報告書
- 池上知子・井上敦史 中学生におけるストレスと攻撃性の関係——攻撃衝動・攻撃感情に注目して——日本教育心理学会第43回総会発表論文集、248.
- 川上亮一 1999 学校崩壊 草思社
- 小杉正太郎 2002 ストレス心理学——個人差のプロセスとコーピング 川島書店
- 右高和生 2002 修士論文「児童・生徒の学校と家庭におけるストレスの研究」
- 三浦正江 2002 中学生の学校生活における心理的ストレ

スに関する研究 風間書房

- 三浦正江・坂野雄三 1996 中学生における心理的ストレスの経時的変化 教育心理学研究、44-4、368-378.
- 長根光男 1991 学校生活における児童の心理的ストレスの分析——小学4、5、6年生を対象にして——教育心理学研究、39、182-185.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1992 中学生用ストレス反応尺度の作成の試み 早稲田大学人間科学研究 第5巻第1号、23-29.
- ラザラス, R. S. & フォルクマン, S. 本明寛・春木豊・織田正実(監訳) 1991、ストレスの心理学——認知的評価と対処の研究——実務教育出版 (Lazarus, R. S. & Folkman, S. 1984 Stress, Appraisal, and Coping. New York: Springer Publishing Company, Inc.)
- 斉藤浩一 2000 学校ストレスのシステムのアプローチ 風間書房、2-14.
- 坂野雄二・大島典子・富家直明・嶋田洋徳・秋山香澄・松本聡子 1995 最近のストレスマネジメント研究の動向 早稲田大学人間科学研究 第8巻第1号、121-141.
- 嶋田洋徳・坂野雄二・上里一郎 1995 学校ストレスモデルの構築の試み 早稲田大学ヒューマンサイエンスリサーチ Vol. 4、53-68.
- 嶋田洋徳 1992 児童の心理的ストレスとそのコーピング過程 早稲田大学ヒューマンサイエンスリサーチ Vol. 2、27-44.
- 滝 充 2001 ストレス・チェックリストを活用した生徒指導の試み 国立教育政策研究所
- 高橋裕行 2002 中学校の学校ストレスについての検討——中学校におけるストレッサーに対する一次的評価と二次的評価について——愛知教育大学研究報告 第51、pp. 101-110.
- 田中宏二・谷本弘樹 2002 児童・生徒の心理的ストレスに関する研究動向——学校ストレスと家庭ストレスの関連——岡山大学教育学部研究集録 119、141-146.

受付日 2008年9月30日

受理日 2008年11月4日

Abstract

The purpose of this study is to identify what kinds of and how much environmental and mental stress children are experiencing at home and school, by conducting a fact-finding research into children in elementary schools and junior high schools in the City.

The result are as follows:

In the cases of elementary school, there is a high correlation between whether children can feel that “I enjoy school life”, and ① whether they understand teachers' lessons and classes and ② whether they are in good terms with friends and teachers.

On the other hand, nearly half of the children answered that the primary cause of stress is “study”.

In the cases of junior-high school, children put the highest importance on ① friends and ② study, as cores of their school life, while the primary cause of stress is also “friends”.

The results also shows that many children are experiencing stress in their family life: for example, “My parents are too busy”, “My parents don't understand my real feelings”, etc.

The next step of my study is to conduct further fact-finding researches in other regions, in order to identify the actual conditions of children's stress from a viewpoint of “children and their living environment”, to help build up favorable environment and improve the situation.